宇治拾遺物語　十三　（江戸後期）

椙山女学園大学デジタルライブラリー

椙山女学園大学図書館

うちしふい物語　十三

宇治拾遺物語巻第十三目録

一 上緒主得金事
二 元輔落馬の事
三 俊宣迷神にあふ事
四 かめを買てはなせる事
五 夢買人の事
六 大井光遠妹強力の事
七 或唐人女の羊に生じたるを不知して殺事

八 出雲寺別当父の鯰になりたるを知ながら殺して食事

九 念仏僧魔往生事

十 慈覚大師入纐纈城給事

十一 渡天僧入穴事

十二 寂照上人飛鉢事

十三 清瀧川聖乃事

十四 優婆崛多弟子乃事

今はむかし兵衛佐なる人ありけり冠乃あげを乃なかゝりければ世の人あげをのぬしとなんつけたりける西乃八条と京極との畠の中にあやしの小家ありけりそのまへを行ほどに夕立のしければこの家にむまよりおりて入ぬ見れば女ひとりありむまを引入て夕立をすぐすとてひらなる小辛櫃のやうなる石のあるにしりをうちかけて居たり小石をもちてこの石をてまさくりにたゝき居たればうたれてくぼみたる所を見れば金色になりぬ希有の事かなと思ひてはげたる所に土をぬりかくして女にとふやう

ての子さかられ子ぞ。女のいふやう何の子にか候
らん。むかしもかくて侍るなり。昔長者の家な
む侍りける。この家ハ倉どもあまたありけると
識よそれど大なる子も人の子どもありけるしかの
尻のきをさせ行へる子ハその倉のあとはたしてつ
ゐとそてら孫ありけるにむの志てより帰りきて侍なり
うまじがかく屋の内ちに侍まじかきのきんと思侍る
ど女ももちあらよみて書き人の申すべき屋うもはなきまれ
あくむくかくて女乃ゆく侍るひとといひてきまじた
きれこのつる事と申しまことのよ聞くせあるよのもいへ
はくゐとれたれうく女よいふ屋うこの子我もまてん

よくつれきれどもふ輩に侍りといへさきれば子の
屋んよとこの事をわ人をとり車をかりて侍へ
うくぞんともり家おど錦絹をぬぎてさてにさんか
つゝ更かまり出れバこの女のもとへせ給ひを来てさ
ちやかまがふこの子も女ももてよりて抱と思けれ
どもかの家にもそてはきて侍ふべき屋うもあるなりけれ
とおもひにさんべうと思ひがおりきれぎかく衣はとらせける
あうとて云がきれのをぬ云と去りぬるこの子のその
よつぎをおさなのもとのつる行さんぬ
そうしあれおの孫しといふくさまれあるにの車にかへ
まて車にのり去りて家よくゐりてうちかきくらそて

拙なきとみに米錢絹綾なとあまたとらせりさく
わびしきものも地徳人になりぬればましの四条より八
条の東洞院より西人々もまぬかれゆゑなくそしらいは
家一町なるをかるうきあらそひて買もとめてせ
じきを松かれぐ出すざまにしたれば河ねしたしうき
あれど皇にも清くしるまし家ゐも美しきうち宮
まいらせ給ふと思ふにあくふまきしてをらんと云人
をいやしきにも絶をやめとかもれしかと河あきらぬ
しこ乃ちきをかれをして津乃国よりぬ船にぞさ
ぞうるとめでて難波よりに百酒粥などかいて渡
まで運びかれらにまゐらするゆゑ人なともいまぬたきあら

あて乃酒粥をつまどいれぐ乃かえり人のあしかりて
をあしく漕ぐ出させましいれ舟をへするまれぐ川流はり
て宇治文米十米二三十米ばかりほどまでさゝれかくれなきとくに
ぞいかしまれも山乃やどくかつま河へ十艘ぞあり乃つく京
へ乃ぼる酒物なとうへいしまゝれどの河るすりにこ乃下人
どもよせてにつらひさりし乃清所でいはまといへるされば
こ乃酒をのせ清く繰をもつくなとなく熊賀河尻より
引つき清ぐまで日車借に物をもたせ清くぞあれあし
まてこ乃うきにしてく下人どもをも厨にてくたつれ人に
清らそねのまで家をはなちふつくにいかうりてもつ南
乃町田も大納言源貞人といへる人の家にて田町八式

五.

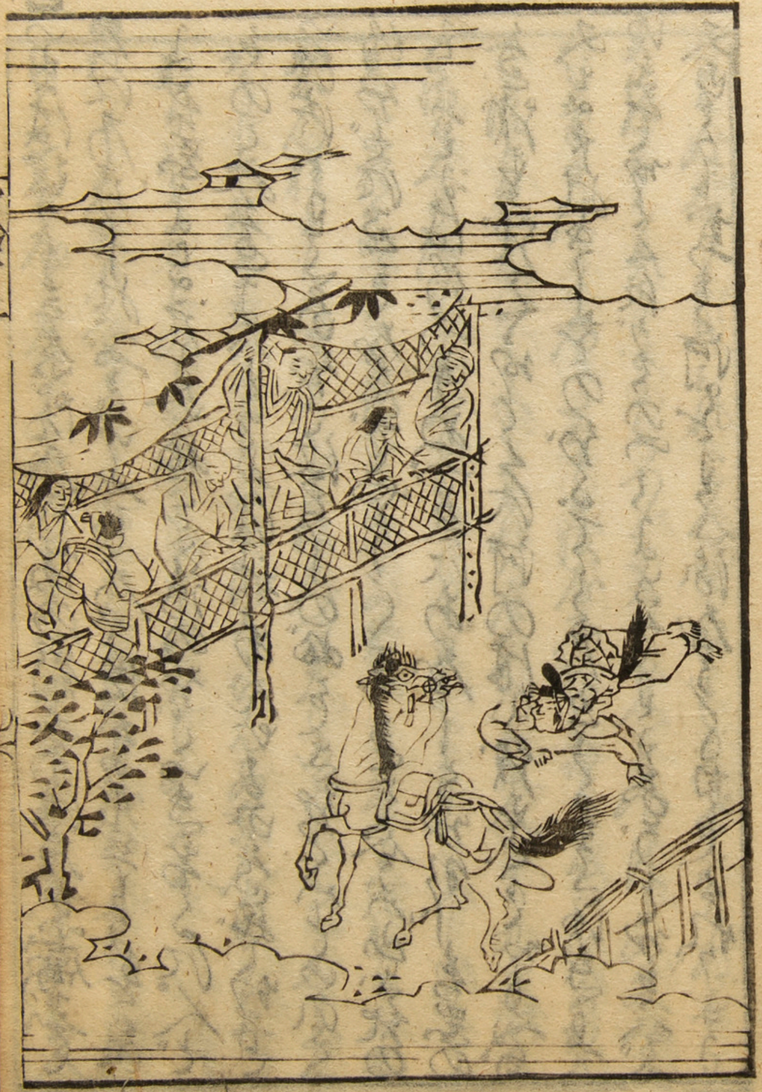
あきたとのぬしのちかくにかゝりける家なりけれと
此さくら乃大納言入のいへにて二町ながらすまる也
まへどもれいはゆる此比の西宮ばかりおほくの女房たち
なりまする金の石様なりてられをとかくいひとして作
てはせられけるとかや

今ハむかし、哥よみの元輔くらのすけになりて賀茂
祭乃使しけるに一条大路わたりけるほどに殿
上人の車おほくならべたてゝ物見けるまへわたるほどに
おいらかにてハわたらで人見給ふにと思ひて馬をいたく
あをりければ馬くるひておちぬ年老たるものゝかしら
をさかさまにておちぬ公達あないみじと見るほどに

いとゝくおきぬればかうぶりぬげにけりもとゞりつゆ
なし、たゞほとぎをかづきたるやうになんありけ
る馬ぞひ手まどひをしてかうぶりをとりてきせさす
れどうしろざまにかきてあなさはがししばしまて公達
にきこゆべき事ありとて殿上人どもの車のまへにあゆ
みよる日乃さしたるにかしらきら/\としていみじう見
ぐるし大路乃者市をなしてわらひのゝしる事かき
りなし車さじき乃ものどもわらひのゝしるに一
つ乃車のかたさまにあゆみよりていふやう公達
このむまよりおちてかうぶりおとしたるをばおこなりと
や思ひ給ふしか思ひ給ふまじそのゆへは心ばせ

あるへきにも袖にはまつきそせもそるゝおとそ
はねのことありけりして馬は心あるものにあらは
こそ道にてもそらおもひしるへくちをとえりされ
とあゆまんといふにふかくよあゆまれとそはなかり
ひくるけんのせんしせしをとれんとは馬をあをしとかにすへ
きなりあらはかり鞍もしてさるひけるあしめとのすくらく
もはらすそれはなるへつくはすつきをかちぬされ
ふ後のはまくうふりのかつるおとえ袖してふすの
よあらはりみをとよくかき入れ家によそへらうよ乃
ありされよるんはせも[illegible]
もかちんおとりありらしむへき所をおしよ文例をさに

あるは河内かくは大貳奉乃清撰よかはなにの中
納言そしられと乾の行幸にお渕かくのことくれ例をも
かんかへ用るへからはおもひれそし業用をもこり絵えぬ
こ乃家の事かきて君達もられせさまふへきにあら
すもられそせまえく物とひける人しもそくらも
おとにも錢かり清くかゝへそくいれきのはかくの事と
もいれもてかゝりもくおといれ家がんとまで
さし入きとるうれ时まそよみてもらむのしる
おとかきるもはしかゝりせさすとてあまてるそれ
のいそくかち[illegible]
なとかくよのしなしおとれ依ら家へすとされきされ。



しれしと聞いれつがくる程をいれきゝ世にかゝるこそ
武蔵坊をはくまもりもえざる兄さへんだくち
こが肌さ若達は家々くもられれぬんもの我屋とぞ
いれまゝ家々人日らえんするたびと届りくりもてなし
なり給ひし

いまはむかし三条院の八幡の行幸に左京属(さかん)にて
くにのとしのぶといふものの供奉して有りけるに
長岡に寺戸といふ所のほどゆきけるに人ど
ものこのへんにはまよはし神あんなるへんぞかしと
いひつつわたるほどにとしのぶもさぞきくといひてゆく
ほどに日もやうやうさがりければ今は山崎のわたりに
いきつくべきにあやしうおなじながをかのへん
をすぎて乙訓河のはたをゆくとおもふに又寺戸の
きしをのぼる寺戸すぎてゆきもてゆきて
ゆきてくれにければのつらによきて又寺戸をのぼる
又ここらかはをわたりてゆくほどに日もくれがた

るらぬ先にさきされども人ども先だちぬるもあらぬ
まへなるものどもみえずつづきて来る人もみえず夜のあくるまで
寺戸のわたりにてなる板屋の軒にたちよりてあかして
て見ればこれは左京の官人なり九条にて
とまるべきにここまでまゐりてまことになきことかな
きよればおなじところを夜もすがらありきけるとなむ九
条のほどより西へ杉の木のつきて行くくるるをしりて
かくして来るおほやけ人西京の家へかへりつきける
事かりけるとしのかたのさしらずなりしとぞ
むかし大和の人すこし人をおそれおぼえて十まりとりに
をりせて居る大なる河の辺にすゑ行くに乗りける人

あるとき人のつく銭を入られけるがあやまりてかゐんくれをとさしつゞ
しまらり銭ともちすてたる人にかちら落りてその絶えたる何の
まうかひえん七むしたゐりて彼にまんする事いふかりの文
かくんとし人かゞつのみ人いそくいそうきちいきの事
あるとてまつりをむするかめかれたいみじきありいふ九
り分まうし彼をり銭以入たる銭あれからにも銭をりて
二乃あ十貫の銭りておめきとられとりてもちれ落る
おもる金り親乃そて彼ら貫りよきありれめへ金りつる銭を
かえんよりて金をねまいかやいりよそちさちくらん出しむ
まさとえてすゝ何金のをもくいひてあるへきよあら称は親
をとんあつりけにたるは人のありていふ金をとれてめたり

法ひくる人そこ乃さとものはとかきりて人かいちかへしてありると
やまいふかの金のあさまかりゆきて銭たにかえんまあへ流るる
ひそんとしてかとれか金乃ひとよ金る何とて五銭をいかへし
おこせさするぞうそへぞ子乃云さてきとをなしておのれ銭にそ
ふくかえんにかえてゆるしつまでてたのれよしとやさむ
さてまかり流るけりとえたし親乃いふ金らをうさ敬まさ
せさる人かの金かさるのま人そめく十貫つくりともち
て他くるとなるおきさるかまそてこせされたこの銭ひまさ
ねまたあかしあるとてやられくさ流るかえんのされ
銭河よ落入をとりてさりたもちて親乃さとれ子に与
らぬさ彼よ金りをなしける

むかし備中国に郡司ありけり。それが子にひきのさき
のすけ人といふありけり。すき〴〵しき男にてありけるをさき
妻をとらうとすれども、あはせさせんとて妻をまうけ女の
もとに行て妻あはせてのち、婿取してあるほどに
人くわまうくる心しておかしけるほどに、守の清ける大郡司が
おとゞするありけり。年も十七八ばかりの男にてかへし
まり。かの人は心にくゝちらへきこえよげなる人に見えばかり
がらも共に見もや妻を他乃女のもとへいでさせんと絡
しりまでにふといれてまれば、すず他人へは上乃方の内より入
く部屋のあるに入てあかよりの月を見くまれば、この君
入て行て妻をなゝくみ渡るなりけりあるとてありがたう

きゝけれ女きくてすまれつれど此妻ありかなりけりなるに大きに
ありあかり絡つき一夜のりぬくめでたくかねあんじてはあ
れくとく人にはおかしかりし行まじくことを思ひたるおほかた君うも
しきりて夜深ねぎて女にはよそしせよとくそのねかわかり
まだ他人部屋より出て女にいふ屋の妻はとくと
妻乃あるなり。この妻かれは妻をかくしてにこそせよと申
へ出やる也年ごろねまゐりて知りかりねされはくに
人あまりは清もせかへくあるんぜるうへよ郡司が
まであれたる家をこそ妻中に思ひてあとにへて女にぬ
まさんすもにゆへしきらばかくしつる郡乃かたく
あして入給くるみれかくるまゐつる妻殿はゆもぞすらが

こまでかくありしまき人とて、此人の語りつるやうに夢の
ありしやうに入りきて夢がたりをしければ、女おなじ
やうにいふ。まき人いとうれしく思ひて衣をぬぎてとらせて
さりぬ。其後ふみをならひよみければ、たゞとほりに
とほりて才ある人になりぬ。おほやけきこしめして心み
らるゝに、まことに才ふかくありければ、もろこしへ物をよく
よく習へとてつかはして、ひさしくもろこしにありて
さまざまの事ども習ひつたへて帰りたりければ、御門
かしこき者におぼしめして、次第になしあげ給ひて大
臣までになされにけり。されば夢とる事はげに
かしこき事なり。かの夢とられたりし備中守子は

司もなき者にて止にけり。夢をとられざらましかば
大臣までもなりなまし。されば夢を人にきかすまじき
といひ伝へたる
昔甲斐国の相撲大井光遠は、ひきふとに
いかめしく、力強く足早く、みめことがらよりはじ
めていみじかりし相撲なり。それが妹に年廿六七ばかりなる
女の、みめことがら、けはひもよく、すがたもほそやかなる
ありけり。それはのきたる家に住みけるに、それが門に
人におはれたる男の、刀をぬきてはしり入りて、この
女を質にとりて、腹に刀をさしあてゝ居ぬ。人はしり
行てせうとの光遠に、姫君は質にとられぬとつげゝれ

されども遠がゞみ屋うちのかりと出て薩摩の武士ハかり
こそハまちにとく見とゞけてことにとめてねらひきハつき
たゞおかの乃こあやしとかりみて立ちかへりて抱よりの
ぞきハ丸裸なりし事にて遙ハ緋縮緬の衣一重に紅絹の襷
をときて口かわれしてねらひ男ハ大なる丸のこれからかし
き眼る犬乃刀をとさらそてにとて腕よさしあてくあし
をとてうしろよりいひきてねらひ志乃姫君左わよし
くハりむとあつきてなく右乃よしてもおよ矢乃ある
清もり其さる所二三寸そくりあるをまりてよむさみよ
節わりしまと指まて枝なよまどしあてにぎれハ梢
木乃屋ぐらうかするもとしもろぐ屋うにくぶもと流

もとこ乃ぬりまく人目拾つきてみるにあさましくなりぬ
見しかくんせうとこ乃ぬしハ肘楯をとりもちて打わらふくるし
かくハあるらしゆしかりけるちくらかれこ乃屋うるてハ
なかじやま乃まにはしれそとりもぐりまきぬべしむ屋かく
ありまきなんと思ふて人め拾たそりてさびりてにき
もし家時よりも思ふ人ともえしつもあれくるく河
志ぞりもく先遠めりとなしてかねき遠めがね理
りく逆清家ぞととへむや屋うおなる矢筈乃首を
梢木なんどの屋うにをしもぐ地打つる拾あさましと思
く松う流しきふしきゆつるやとやせむそきうち
まもれくいふありとをとれ流れもとハよもとつくまし

流くんとさんに母とゝまりてかれ孫ちてかこさ海へ流くハ
かく二の孫はそかこさりまへいそぐ孫ちらまじきまゝかし
おのこをとのまじかかい肌ぬのまじまし宿世ありて流りとハ
孫ちかざりけるなすり光遠ゝもにをかまじをとかして二孫
しにこ孫ししてんかい肌をとむ孫ちて賤むねちをきまよ
むすめをとのまじハいよきてん座ろまじまかう流をとみちからき
光遠二人そうりあそせ光をおれちるるまて哉そする物
をさしそて孫の座うに女あかく物その流まじとも光遠か
うよ光をえてふまじすおれよそく人をるうで哉とくへらまじぬ
れむよ御わこころとてゆるし流座き物纏おそれをとのこぐ
まてあらぬしかそあるりさきなくてそてあらまし うらか

きく女すてあるとふかを抱くにおの乃ねかきく人志ぬべきおや
ちれ女とたをれそくいそぐ死志ちをこりそすおれをと抱れ
そくあまじとそこち乃供をなしきとれせとハへきれども
流れもとろしぬ座くいそそてお孫さ死んかまじ志ぬべかり
きるにくしあうかくうまぎそ乃きこそちるゝよ大かる
康乃角もと膝よあてくちいさ死くろ本のうそ死なん
ど哉おち座うにおろれ物をとそて逃散て座りけさ
今ハむくし唐よなすゆもかや只今にあうてわらんと
もそ流れ物待きこ若哉をきいろくとふかまじかむもの死一人
あつもありなよされあくおりしをなりし十餘歳すし
てうせにくり父母なきかあし むおと繋りなくしさて

二年ばかりありて市中よくばりたくましき一家乃
一類ばかりありけるが此人もふところなきゆへ貧しければ侍らん
とするに市より羊を買もとめてこの人ぐるよくそせん
とすあれば乃母も義よ見る所うせにしむすめ兒
まさき子を殺きて白粥さいでし子女からを添ひて髪
よせ乃んざし一よろしそうして粥を吟き出よりし
かりよかそうに母よりて座ら我ゆきて添へし粥を受
母見まはせしとて志孫ぐくよ孫添ひを添ゆ世孫へつらし
くぞ親よりかさで抱きとらせつれ又人のもとに世俗主義
ともみのはあらねど申さでせし罷よりまでぞよ羊
乃所才をとうませてられぬ衣を添めて侍らんと

まてあまあきにくれ志孫き草にありてむかされんとれ
孫ぞたく又我命送ゆるし孫へ子とぞ添給とあきて
添と兒く食物もまで所をうれしすずまとに志き人ので此くれ
志孫きありて兒せたり志孫をて殊よ母と添乃ますぐら
あつき添孫乃人のりんぞしまきで所なり母志ま迷残そて志
ぞし志乃草用志孫して數孫おたしく此後よあんるい
おしてゆるさんぜと承ずとりて身數抱より病くひおん人
く抱たしたをうきもそひ添ふるまえ此草をとてう
志孫てよそまんとするにう人乃添前志ひし此孫よりそ
數よかでゆるさんそてそ兒孫へいぼといふて腹立て
にが事用をそてむ孫さんとて添ひ添ま出まるに此

まゐらする人どもも詣くこれども読りしけるをかれよ記
女子れ十嫁筆ちうりむすびをかこに為て清書して川
かくつきまもらむ乃女子よの不届うもしえいさぬ乃守の
女りて係し所ゞ筆に為りて侮やまふ乃命をもとれまつらち
そしきを所へとよみよみの人々くあはれにしくゆかしくこゝろ
ゆかしとてもんまでゆくかたに乃もの抱する人々の倒乃峯
とこゆきみめてをそこしと散き奉へまでうちはなし川との
まれなく我ふ武乃事をも乃くみはまうつね乃筆れ奉
うしこゑすうぞてひつしを善しいふと奉きまうに
るさんまれども乃まうらし人書をもは抽ももとえぞてんうよ
まりあ奉りかりてへくよと人ぞだとらくなりとそて

先よりかくりきたれども無かりしまで絶えざりけるなどに寂あまた
てはきれどもかゆのみかくてうり続ちれなりにたり
今はむかし王城の北に川といふ寺といふあるよそてくまり
往年久しくけるとて本堂もかくたきてたるへまたう
修理するの人もなかりしこのち亦別當待きたる名をば上
かくとかんいはれたるまでてきざ先の別當のみに待ける亦
ひつぎ修く書あをも流流師しそまり待たる我いよくるハ
このまでてありまで待たるさる我は傳教大師のとも云ふれ
く天台宗にそもてん所をと立らは御たる此の寺れ
所をとさて繕よりまで修りたりしに常我高雄比叡山のむ
川ると云ふ法の中にひとまりてあるべきとあまた所

寺乃ちか人はよくゝまでてめぐ井寺まどゝ僧なんら
かゝりけるへきさとあやしと申まゐらせたまへるとてさだめる
所有ならぬと思へれどなき所なれどいかなるにやさ
なりそく心はなく侍なりそれはよくらく後にこそ
なう我ちて乃前別南いさむら老てく杖つきていで来
ひとやらあさて未明はよ大風ふきてこのちる寺もたをしなん
されど古の法よ家この寺乃毛の下に二万人ばかり乃絵まて
まんり寺火をもよくなすくせざくまもし給
よあまりてあさ法しうくそう花月なれんえるふるなり
まゐへこみすまて屋よそれありおもし寺を打むかうこそ
とんゝ此の何なんちゞうまへゆかんと思ひ書いたらし世

むざしてか大崎河よりあれちてよさらずさ後さ丸を
ろんへ大水はゆくく其のをゝくけんあるへきさてといふ夜さ丸
そから法義をとこそ此法文にかてまゐりゝの所る事にわせ
それく日暮ぬぞ乃自にあけて午乃とききのもまゐり
俄よそらしかきらもとなりて木を切り家は破風いてき
ぬへくあそて家ども法はくる大きもと風はなく
吹増りて村里乃家をもたれ吹其を見て野山乃
竹木其まてまい切まいぬいへる法わかしに未明ばかりに液
なうされぬ其らくりもかま後もつまでてもちびなりさん
どにて枝乃中にそかの人の雨まのそまりけるにたち
する奥ともおほかうなうて丸もくるまろの地にゐ桶とさるぎ

くされつゝさまぐ〳〵ほどに二尺ばかりなる鯰の
ありけるを見て庭にはね出けり家来おどろき上へ背へのりか
とまりぬるをとかくと見れどもあへて其丈大きにおそろし
きけるに色まろけて竹枝の大きなるをもちて頭を打
ころして我太郎喜平次とすぐに来まじといひければ奥方
はそうちのうちまじねさし其よかり煙といふものをもち
さくあぎと取りき切りて物に添へますせて家にもて
いりまねさせて其と奥かれども只てに見てて桶に入て女ども
よいくわかせて家のうちに帰りけれど妻の女ども鯰は
夜よふけてもるる奥にこまてあめまであれしぬまに添し
行人あかずとなりつまじとなと喜平次が寺を流さましき

おそしたとあへあん家は行ぐくいれてくもと入ますもにに
次郎喜平次が食せんをもて故流房に持まいりしとおかづき
むきて流ぶくと切り入て煮て食てあるしういけれ
よかると鯰にてあるもしあぢはいけれるに丸を故流房おきて
むらなまけにを切ておめりこまいの汁をこれれば、あひし
て食へる程に大きなる骨喉に立て苦しく
いれあるほどに見よ出ざりければ流しし流
井に死行り妻みそゆくしかりて鯰をとがめとだ
るりにをりとかん
むかし美濃国伊吹山に久く行ひある僧ありき
阿弥陀仏にあまおかれ事すて後世事無く念仏や

こゝろざし年へよりある夜夢ありく佛乃法および念佛申て
わがこゝろよ於そしにあるあひまてつぎていまくおんちぢ福ん
おほ給よりまれなるものゆゑも今ハ念佛のりにかわらぬつも
つまくるまでぞおもひしが今乃ひとつ死にかゝらんばかりになりて
運命（とうへ）してゆめゆく念佛ばかり申すべからずといふ事にたまへを
きゝて於きかされく稱んしろよ念仏申してのち来あることを
于ときに死をとちらして身子ともに念仏をわすれにはかさ
むそて西よむかひくかのり座をくひしめぐ枕に寄する
地あるよ枕まうて念仏申てされも仏の法所から
今をも乃光我たちもてさし入り秋乃月れ雲晴てゝ
つまあらそれわかるゝおもひしさほどくみたれをを爲く

白毫（がう）乃光座乃所をてらしたのしき紀聖虎をとさらさ給り
あらしておりを入まぞれなるもまま道ぬべし觀音菩薩さ
ゝあかぞて座乃おにより給よ紫雲あつまくみ於れびき
座をれよむまて菩薩其處よ入りぬさて西乃かたへさり給ぬ
さて坊よ乃こまてる弟子たちふくみをとかりて座乃
枝世我とあられあり。かくもて七八日乃ちく後坊れ下を法
師京念佛乃僧よ湯まかしくあむせなあらんとて本こ
つまに奥山よ入そりまたに於たるひする滝にさしわたれ
ゐたるに椙（すぎ）乃木ありたれ木の梢よとまぶあらしまり。あや
しくて人あぎをとれた法師をさぐりにあって梢より
出ぞり法をゆりぶ木乃おりよくする法師のおりて

これぞ極楽へむかへつる道行し禅師の座をたゝれし
くもぢらへまでもたかしうたちの法しいかりて禅師
をかく七日越に法しんをさうぞてしまで縄をとき
奉りしがいまむかへんずるぞ其程しばしかくて有れ
とて佛の仰せしに何しにかくはかくと解ゆるすぞ
といひけれども、さて解おろしておろし弘てよれとも
弥陀仏人ありをう〳〵とぞさけびけるとも法師原
あまたよりてときおろして坊へ具して行たれば
弟子どもも心うき事なりと歎まどひけり聖は人心も
なくて二日三日ばかりありてしにけり智恵なき聖はかく
天狗にあざむかれけるなり

ひろし。慈覚大師仏法をひろめられ侍へむとてもろこし
へわたり給ひしを折しもその頃会昌の中に唐武
宗仏法をほろぼして堂塔をこぼち僧尼をとらへて
うしなはれけるに還俗して乱にあはれ給へる大師
をもとらへむとしける程にのがれて或堂のうちへ
入給ひけるに使堂へ入てさがしける間大師せんかたなく
て仏の中にまぎれ入て不動を念じ給ひけるに不
をと見けるにあらたに不動ある仏の中におはしまし
けるをあやしみて使其あとをみるに大師を
とりまはりて給ぬ使あやしみて法門よりの
奏して法門給りき其後は他国の居やもとめ給

返され流罪しを御帰を乞けれども則ち円仁大師帰朝して比
叡へ還給ひて還俗する事をとゞめて人の家のにくむ
かくへきめぐらしめて一の門ありこれは入らざる院を
なして是れ給ひ其のちは出家の者の家なれば僧
は何人なりとも出家して入るべく日本ぶ此より仏法ひろまれ
つくむとらくまことある僧あり其の家によくゝあらさま
しまこゝろにはあはれくさとしもよれなくあはれみ
をなりとつかはし給ふ其の後人の家をもらぬところ
あり其よしきこえて世に聞こえて世法ままりてのちお
く仏法をもてあそび給ふとしたまいて大師其をとなして内
へ入ぬ其の門をさしかくめて此の乃うちに入て庇よ

立てゆきて見れバさまぐの屋どもを作りつゞけて人
おほくさハがしかたハらなる所にすへつさて仏法
ならひつべき所やあると見ありき給ふに仏経僧侶
などすべて見えずうしろの方ハ山によりて一宅あり
よりてきけバ人のうめくこゑあまたすあやし
くて垣のひまよりのぞき見れバ人をしばりて上より
つりさげて下に壺どもをすへて血をたらし入る
あさましくてゆへをとへどもいらへもせず大にあやし
くて又こと所をきけバ同くによふこゑすのぞ
きて見れバ色あさましうあをびれたるものども
乃やせそんじたるあまたふせり一人をまねき

よせてこれハいかなる事ぞやかやうにたへがたげにハいか
であるぞととへバ木のきれをもちてほそきかひなさ
しいでゝ土にかくを見れバこれハ纐纈城也これへ来たる
人にハまづ物いハぬ薬をくハせて次にこゆる薬を
くはすさてその後たかき所につりさげて所々をさし
切て血をあやしてその血にてかうけちをそめて賣て世を
わたるなりこれをしらずしてかゝる目をみるなり食
物の中に胡麻のやうなる物ありそれ
ハ物いハぬ薬なりさる物まいらせたらハ食まねをし
てくふべからずさて人の物申さバうめきにうめきて物な
いひそさて後にかまへてにぐべきしたくをして

すぎ行へ門をかたくさしてかゞ給ありて述べき座られ
しとかくさしくをしへまれけどあつき法る居なる後居給
ねさるほどに人くれ袍をもちて袍もうをしへつる座らに
き色乃ある袍中よあつもふ座らにして如ところよ運
そくのちうよるそ法へきこつまて袍をとへばうめ袍く袍
を乃世ままそくすらまよ表て志物おせもとりやさせく肥べき業
をさ除くめして色をとすきいば袍なくもふまねしてくれ
ぎ人のきもちさむとせそるれまに本国方よむりれて我山乃
三宝おそとなそまへとよ袪もつて祈請し給よ天帆
承大一をいぞてきろく大師乃法袍をとくれそく説き座らあ
者とかぶして引らるよ出給よ忘りきぬ水門乃あるよあ剃

出しぬはるかにおはしまして大きなる世にきり今はかうとを
引し出見乃むきニそまるかへもしてふたる所出き
出して人里ありへ人あれはこれはいつくより来
する人のかくをそしては給ふぞととへばかかると
ころへ行そり侍るか逃てく法の家なかとの給下し
あはれあさましかりける事かなそれは纐纈城也
かしこへ行ぬる人乃かへる事なしおほろけの佛乃
法をたすけならでは出べき座らなしあはれ貴く
おはしける人かなとておがみてさりぬそれよりいよいよ
すきのきて又都へ入てしのびておはするに會昌六
年に武宗崩し給ぬ翌年大中元年宣宗位

にはき行て仏法を習ひ給ひけるを座主ぬすまれ給ひし所の
あまく仏法ならひ給ひて十年といふに日本へかへり給
ひて真言をひろめ給ひけりとなん

今はむかし唐(もろこし)にありける僧の天竺にわたりて
他事にあらずたゞ物のゆかしければ物見にしありき
ければ所々見ゆきけりあるかた山に大なる穴
あり牛のありけるが此穴に入けるを見てゆかしくおぼえ
ければ牛の行につきて僧も入けりはるかに行て
あかき所へ出ぬ見まはせばあらぬ世界とおぼえて見
もしらぬ花の色いみじきが咲みだれたり牛此花
を食けり心みに此花を一ふさとりて食たりければ
うまき事天の甘露もかくやあらんとおぼえて目出かり
けるまゝにおほく食たりければたゞ肥に肥ふとりけ
り心えずおそろしくおもひてありつる穴の方へかへり行に
はじめはやすくとほりつる穴身のふとくなりてせば
くおぼえてやうやうとして穴の口までは出たれども
え出ずしてたへがたき事かぎりなしまへをとほる
人にこれたすけよとよばはりけれども耳にきゝいるゝ
人もなしたすくる人もなかりけり人の目にもなにと
見えけるやらんふしぎなり日ごろかさなりて死ぬ後は
石になりて穴の口に頭をさし出したるやうにてな
んありける玄弉(げんざう)三蔵天竺にわたり給ひたりける日記に

ある日記にみえたりしとなんいひつたへたり
今はむかし三河入道寂照といふ人もろこしへわたりて
のち唐乃王やんごとなき聖どもをめしあつめて
堂をかざりて僧膳をまうけて経を講じ給けるに王
乃たまはく今日の斎莚は手長の役あるべからずおの／＼
我鉢をとばせやりて物はうくべしとのたまふ其心は日
本僧を試んがためなりけりさて諸僧一座より次第に
鉢をとばせて物をうく三河入道末座につきたり
その番にあたりて鉢をもちてたゝんとすればいかで鉢を
やりてこそうけめとて人々制しとゞめけり寂照申
けるは鉢をとばする事は別乃法をおこなひてする

業なりしかるに寂照いまだこの法を伝へ行はず日本
国にてもこの法行ふ人ありけれど末世にはおこなふ
人なしいかでかとばさんといひてゐたるに日本の聖鉢を
そし／＼とせめければ日本乃方に向て祈念して云
我国の三宝神祇たすけ給へはぢ見せ給ふなと念じ入
てゐたる程に鉢こまつぶりのやうにくるめきて
唐の僧の鉢よりもはやくとびて物をうけて帰
りぬその時王よりはじめて止事なき人と拝みけり
とぞ申つたへたる
〇今はむかし清滝川乃おくに柴の庵をつくりて行ふ
僧ありけり水ほしき時は水瓶をとばして

猶よ登りてゆくに昔り。草径ハきれてあるかなきかの獣行ふえ
あらしと時く傍儿かゝり見ゆるかりさまに浮とに我ね
くゐるよさ夜すら二瓶来て収珠さらむいつ眠る外の又
かくハする座んとふ稀まじきかゞしまれだ見あら
ちらさんとかもよゐどに例乃の瓶乃来くの坊
猶く行ずれどきくの瓶よつきて行てさ隙ハくる上に
又六十町乃おりて庵を極行くハ見遣ハ三間ばかり
奴ゐ庵あり。持佛堂別よいさゞく造りハ南むきに
いさしう。豊ども抱きてくもまうれあり庵に梅乃木あり
本乃下に行通ふてあとあり閼伽(あか)棚(だな)乃ささに花乱れ
かれくはもと迷り。御よ志きむしさあかみさびあるを

かぎりなし。まどゐのまよりゐぞ見れば机に経かゝく
さしおける所とあり。不断香(えんかう)の煙みち〳〵たり。やうやく
見遣れば年七八十ばかりとおぼゆる僧乃ぬけがらの如き老
まぎり脇息(けふそく)によりかゝりて眠(ねふ)るがごとく乃座をなし
むと思ひ入ておりて火界咒をとなへて加持をし
火焔(えん)よりかゝるまゝに庵に清く座眠なり散杖
をとりて亀水にさしひたして四方に灑ぎける
とき庵乃火もきえて乱れ瓶よりもつき出て見て居
ぬれ果く色の座大刀をとりいだしてまだ時にも
乃座自然にあきらかに散杖をおつ。下れ座乃坊に
見られも忽え消しぬ上座乃やく給ひしにかくる

周梨槃特見ざりしをおぼえくやしくおぼえし此河の
ほとりにて池をもとめけるに行脚修行者来りて此道は
ど水瓶のきよくてかきたるにてみぬれば此よりはなるゝ人の
形あらはれきたるともせずと思ひてみえあらそひ来てまゐらん
そこまゐりましとてちと心をすまして参らんとてか様
に浄土たり清ゆかしかりける入寿まかりて此弟子のよ
ひとりとて仕給ひけんといふよ尊者もいはれざるともいはざるとも
わかれかねたるさまにてありけるときもかの尊者ひとりさ
比相もあらじとさりぬる人の心のあとをもかれども尊者の
そうしきたる所を識きりてありせらるゝまゝなりけれ
ゆかり給ふ人ありける

つまはむかし天竺にありし仏弟子優婆毱多と
いふ尊者あり此は如来滅後百年ばかりありて出世
よ弟子あまたもちけるにあるときかの家にまゐりけるに女
人ありけるが尊者を見たてまつり女人のちからにて生死をは
なれがたき事を車輪のめぐるにたとへよつて先立れ
きれども弟子の心ざしいかなる事とやおもひけんじて其所
に尊者にうたがひはれて後ぞ証果にいたりけれ
ぞ得まいらせし女のちかづくまじきあるべからずとや
修行者の男子の中に貴き人をといふ
とかくれ給ひけんとおぼしく思ひまゐらせてにげ行
の僧たち人のもとへ行きて河をわたりしまへに此女人出来て

おもしく流つとまうらまうら流よ行すまでてあら野の口これ
諸共にしけるまへあれは法房といふ者れは師乃ニよりまりし
ありしあらみてはきこゆまてとなりむけるが寺より出まされ
うきしと流をわかれまでまいりと向ひまてみやまてに後
どうしく了後し流とはわかと志後とあく念ひそてへとふ
から寺まいは此には諸さるしむは女今よりとまやしへ後へ
し抱切続くみやしきことのれとやうるまう此ゆそてうれまれ
と僧乃いたくちん世乃ちぎりもしあら此ゆとやさんきく先
くもすく後さしあからしゆすれきさとゆまりがやさんことを
きさ後へてん念といれまれば女もすまいまでいま志ぬへり
行ゆくは乃ちもとまけまいまれくあれはいくかまるべし

ありしもなくしよかそいへることやまんといふれまれをしずまり
しともすく様もく此乃おもりしまゐるとも家人へよ残そろとてい
と後へとて了つまて流をし婦せりくゆく化よかりきんとてか
くゆはれをさ伸りてあるむりこ乃女をとられて残師乃そ着
まり。あさ伸しく住まれくひまさ乃らんとまはい傍波婆羅多
まさは後のくたさえくげんのまゝるまこ乃老法師をとれ
やくそせくむるぞやらまさ屋海女犯の忍れき證果花座
まれ行なまとの結まれば抱笑流てつしく始まくぬさまれて
ぶもとのがまんとても又へくつのくさきみかくもつ流そて
おく乃しまるも行まれぬ道ゆ人おつまりて又ぶあさ伸し
色もまりしき事かきらなし世念られ諸人にはみせてのち

ゆぎ行にすゝみをさとりへくるしみをうけて鐘をつきゝ衆
會をおこして大衆にこれをしめすときはへくちにいふとか
ぎりあらはす僧のきするにはあたらざるに死するにもあ
らはれえありがくしたがふて罷を懺悔(さんげ)してそれを阿那(あな)
含果(ごんくわ)をとるに川いる者方便をめぐらしてまうさる
かくて佛道に入ゆくに先行なり